



「伏見の茶亭」

昭和31(1956)年／紙本・彩色・軸装／109.3×117.5cm／東京国立近代美術館蔵

安田鞞彦は歴史上の人物を数多く取り上げているが、その中でも源義経と豊臣秀吉に関しては画業の初期から晩年まで繰り返し描き、その人間性を追究し続けている。この作品は伏見城内の茶室における秀吉を描いている。足軽の子として生まれながら、策略を巡らせた戦国武将となり、最後は天下人にまで昇りつめた人物として広く知られており、秀吉が生きた時代の肖像画も残されるなど、その人物像は容易に捉えることができる。しかし、鞞彦が描いた秀吉は我々の思い抱く秀吉像とは一線を画している。梅の花を持つその表情は、武将としての威厳は影を潜め、茶室での緊張感と気品に満ちている。天下人としての秀吉を描

き続けた鞞彦は、この作品では茶の湯を愛し、わびさびの境地を知る茶人秀吉を表現したのである。このような文化人秀吉を表現したのは、日本画の革新に邁進した鞞彦の、晩年になって得られた円熟の境地と解釈することも可能である。
(主任学芸員 中田智則)

Contents

- 1 安田鞞彦展
- 2・3 美術鑑賞旅行
- 4 探訪／斎藤彰男先生を訪ねて
- 5 美に遊ぶ
- 6 所蔵作品から
- 7 企画展紹介
- 8 消しゴム版画講座
心に残る私の一点
あとがき

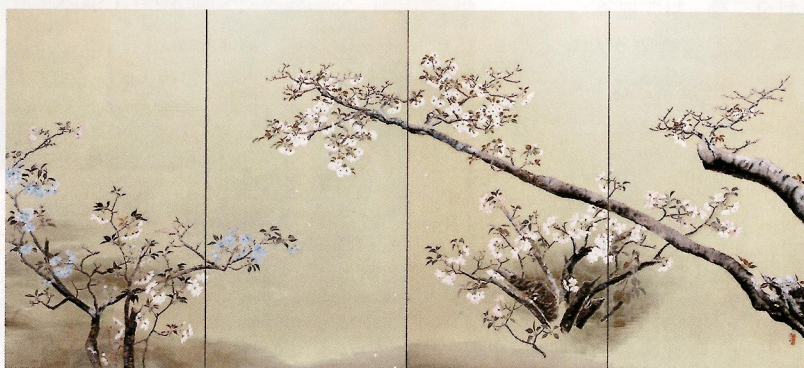
「没後30年 安田鞞彦」展

2009年2月7日[土]～2009年3月22日[日]

茨城県近代美術館

游 美

Y u b i
No. 62



富田溪仙「御室の桜」

昭和8(1933)年
絹本・彩色・二曲二双屏風
各168.1×184.6cm
福岡市美術館蔵
※後期展示(9月1日～9月23日)

福岡県出身の日本画家・富田溪仙(1879-1936)は、特定の型や様式にはまらない画風によりしばしば「異色」「異端」と称されながらも、横山大観の絶大な評価を受けた画家です。

京都・仁和寺^{にんなじ}は別名御室御所^{おむろごしよ}とも呼ばれ、境内には御室桜^{おむろざくら}という遅咲きで背の低い桜の林があります。溪仙はこの桜を題材にした「御室の桜」に数年越しで取り組み、時には冬の枯木を前にして構想を練ったようです。溪仙は横長の画面に、地表から枝を伸ばす桜の木々を自由に配する一方で、八重山桜や芝山桜など様々な種類の桜を明確に描き分けています。さらに桜の幹などにそれぞれの品種名を金泥で書き込んでいるあたり、彼の作品が大らかな感性とともにきめの細かい配慮のもとに成り立っていることがわかります。(副主任学芸員 澤渡麻里)

Contents

- 1 富田溪仙展
- 2 副館長挨拶
企画展紹介
- 3 企画展紹介
- 4 探訪／中村義孝先生を訪ねて
- 5 所蔵作品から
- 6 美に遊ぶ
- 7 春の美術鑑賞旅行
- 8 心に残る私の一点
代議員会の報告
あとがき

京都画壇の風雲児 富田溪仙展

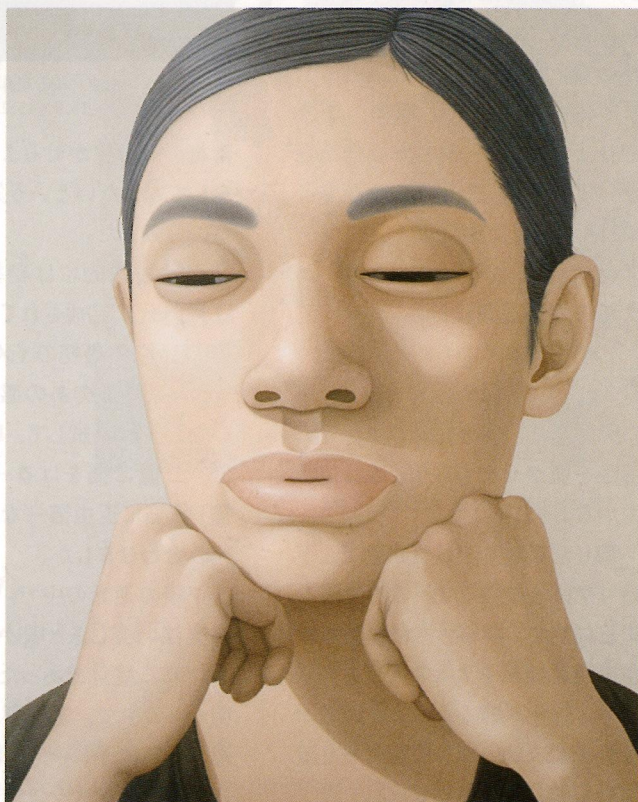
生誕130年記念

2009年8月8日[土]～2009年9月23日[水・祝]

茨城県近代美術館

游 美

Yub i
No. 63



小林孝亘

「Portrait - resting cheeks in hands」

2006年／油彩・カンヴァス／162.0×130.5cm
西村画廊蔵／撮影：内田芳孝

小林孝亘(1960～)の作品は「見る」「見られる」といった関係を我々に意識させます。眼をつむって、我々の視線を受けとめる彼女は「見られる」存在に他なりません。しかし一方で、彼女が脳裏に何を思い描いているのか、その内なる世界は決して覗き込むことができません。また、眼は瞼を閉じたままでも、明るさを感じ取ることができます。溢れる光の中で眼をつむったとき、世界はどう感じられるでしょうか。この作品の前で、彼女と共に眼をつむってみると、あなたにも彼女の感じた世界が伝わってくるかも知れません。

本展では「見ること」に強いこだわりをもって制作する、あるいは「見ること」とは何かを考えさせる12作家の作品をご紹介します。

(副主任学芸員 井野功一)

眼をとじて—“見ること”の現在

2009年10月31日[土]～2009年12月13日[日]

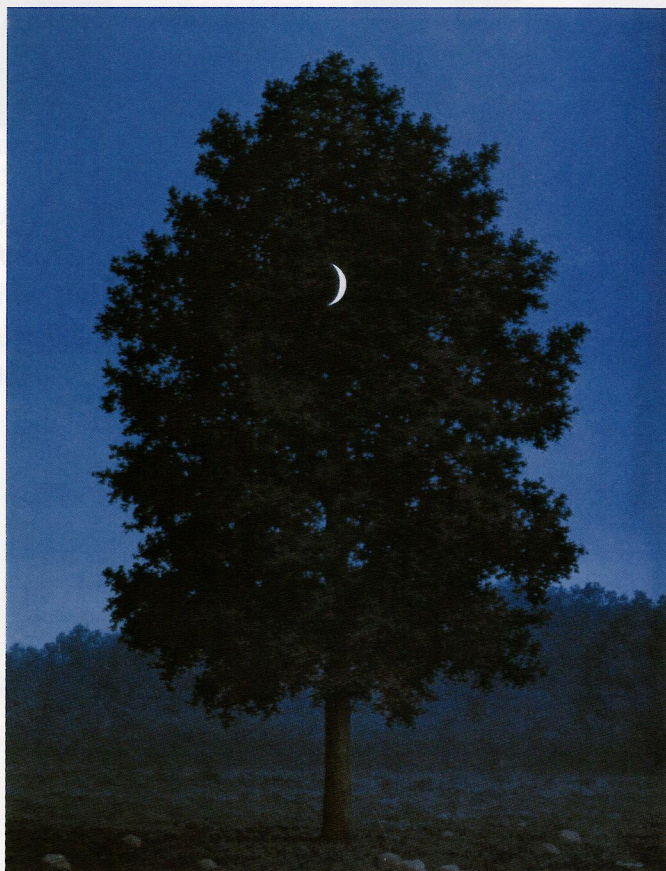
茨城県近代美術館

〈出品作家〉

オディロン・ルドン／アルベルト・ジャコメッティ
若林 喬／村上 友晴／河川 龍夫／鈴木 省三
エミコ・S・ギルバート／長沢 秀之／岡村 桂三郎
日高 理恵子／小林 孝亘／水谷 イズル

Contents

- 1 眼をとじて—“見ること”の現在
- 2 探訪／辻 徹先生を訪ねて
- 3 美に遊ぶ
- 4 5 特集／田中路人を語る
- 6 所蔵作品から
- 7 企画展紹介
- 8 心に残る私の一点
絵画教室
あとがき



特別出品
ルネ・マグリット
「9月16日」

1956年（日本初公開）
油彩・画布／115.0×88.0cm
©ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2009

ベルギーのシュルレアリスム（超現実主義）を代表するルネ・マグリット（1898－1967）の絵画には、私たちの通常の現実感覚を混乱させるような、そしてまた私たちが真実や現実であると思っているものについて本当にそうなのかと問いかけるような、様々な“しかけ”が施されています。マグリットの描写がとても精緻で写実的であるがゆえに、私たちは彼が創り出すそのしかけに、余計に惑わされるのかもしれませんが。ここでも夕暮れの中の1本の木に、三日月が直に描かれるという独創的な発想により、私たちを取り巻く自然の物理的な秩序は見事に壊されています。同時にそれは、非常に鮮烈で印象的なイメージとなって、私たちの脳裡に焼きついて離れなくなるのです。

なお、この魅力的な作品は、アントワープ王立美術館のご厚意により、今回特別に出品が許可されました。

（首席学芸員 山口和子）

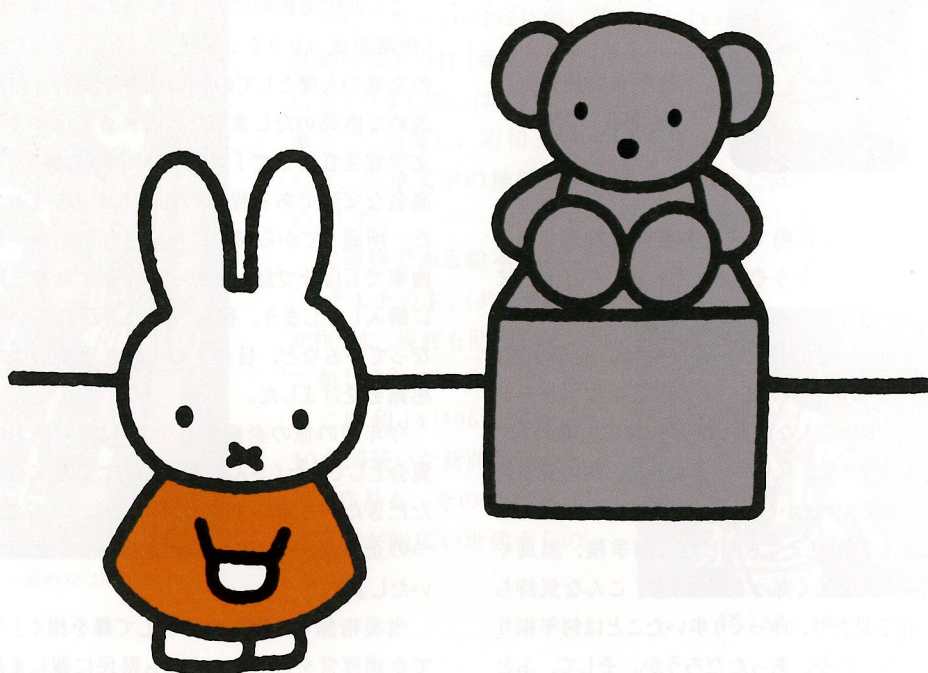
ベルギー近代美術の殿堂 アントワープ王立美術館コレクション アンノールからマグリットへ

2010年2月6日[土]～3月28日[日]

茨城県近代美術館

Contents

- 1 アンノールからマグリットへ
- 2・3 美術鑑賞旅行
- 4 探訪／横田海先生を訪ねて
- 5 美に遊ぶ
- 6 所蔵作品から
- 7 企画展紹介
- 8 心に残る私の一点
更新と会員募集のお願い
あとがき



絵本『うさこちゃん びじゅつかんへいく』より

Illustration Dick Bruna © copyright Mercis bv, 1997
www.miffy.com

2つの「●」と、「×」で構成された顔を持つうさぎで知られる「ミッフィー」の絵本が初めて出版されたのは、1955年のことでした。作者は、オランダの絵本作家／グラフィック・デザイナーであるディック・ブルーナ（1927ー）です。第1版のミッフィー絵本は縦長の長方形で、ミッフィーの姿も現在とはだいぶ違っていました。第1版から8年後の1963年に、絵本の縦横が15.5cmの正方形で、限られた色数で絵を描くいわゆる「ブルーナスタイル」で創作された第2版が出版され、その時にミッフィーも現在のような姿になりました。

この愛らしいうさぎを主人公とした絵本はその後シリーズ化され、55年に渡り30以上もの物語となって世界中の子供たちを楽しませてきました。

（主任学芸主事 春田友則）

美術館に行こう！

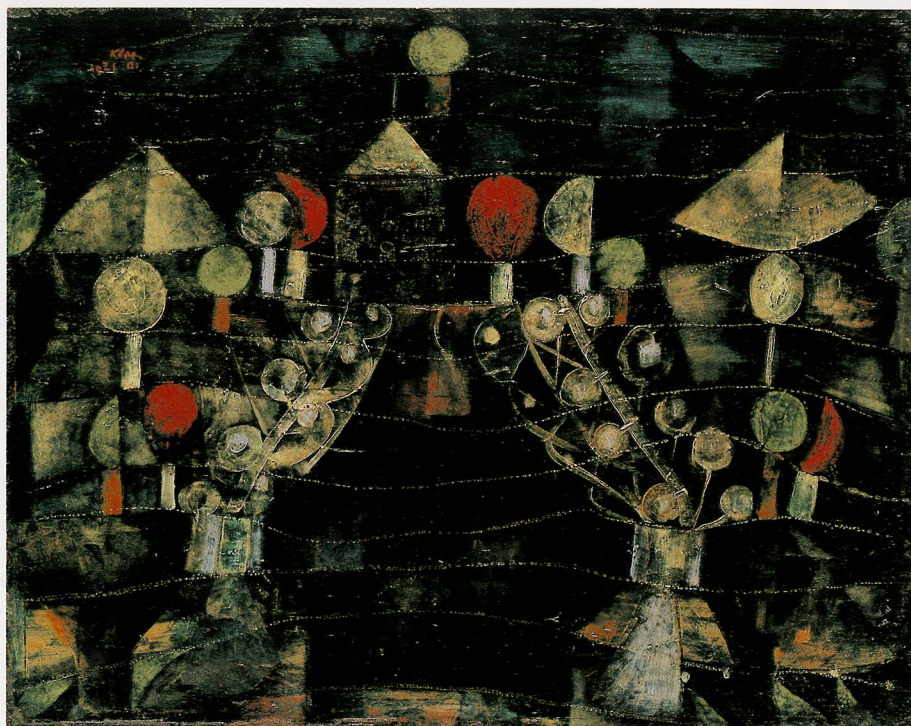
ディック・ブルーナに学ぶモダン・アートの楽しみ方

2010年7月17日〔土〕～9月12日〔日〕

茨城県近代美術館

Contents

- 1 美術館に行こう！
ディック・ブルーナに学ぶ
モダン・アートの楽しみ方
- 2 新副館長挨拶／企画展紹介
- 3 企画展紹介
- 4 作家探訪／藤島博文先生を訪ねて
- 5 所蔵作品から
- 6 美に遊ぶ
- 7 春の美術鑑賞旅行／デジカメ教室
- 8 心に残る私の一点
代議員会の報告
あとがき



パウル・クレー 「女の館」

1921年／油彩・厚紙／41.7×52.3cm

音楽の持つ抽象性や純粹性に関心を抱いた画家は多くいますが、パウル・クレー (1879-1940) ほど、絵画と音楽の関係について真摯な洞察を行った例は稀でしょう。「ポリフォニー」など音楽の概念を絵画に導入しようと試みる一方で、熱心なオペラ愛好家だったクレーは、1920年頃よりオペラにまつわるモチーフを取り上げたり、「劇場」や「舞台」など非日常空間を象徴的に描くなどしています。女性二人によって綴帳が左右に引かれた「女の館」は、何かの舞台装置を思わせます。揺らめく破線の上にリズムカルに配された樹木の記号化された形には、音符のイメージも重なります。舞台の幕が開き、流れてくる音楽は、クレーがこよなく愛したモーツァルトのオペラでしょうか。クレーが奏でた妙なる響きに、どうぞ「耳をすまして」みてください。

(副主任学芸員 澤渡麻里)

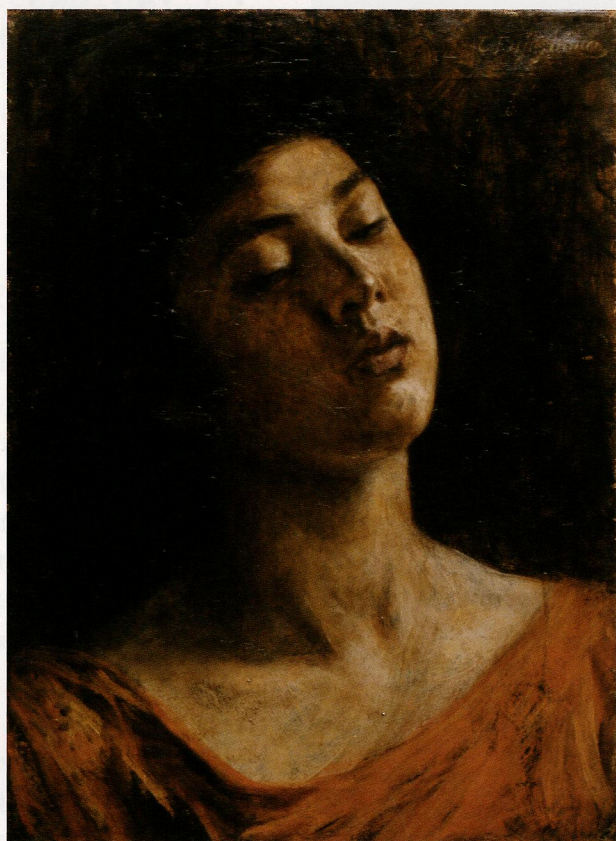
耳をすまして—美術と音楽の交差点

2011年1月22日[土]～3月6日[日]

茨城県近代美術館

Contents

- 1 耳をすまして
—美術と音楽の交差点
- 2・3 特集／妻 栗原喜依子を語る
- 4 作家探訪／谷田川 卓先生を訪ねて
- 5 美に遊ぶ
- 6 所蔵作品から
- 7 企画展紹介
- 8 心に残る私の一点
絵画教室
あとがき



藤島 武二
「夢想」

明治37(1904)年
油彩・カンヴァス
45.7×33.4cm
横須賀美術館蔵

藤島武二「夢想」は、眼を半ば閉じ半ば開けた、夢うつつのような女性の表情が印象的な作品です。くすんだ色ながら透明感のある肌、肉感的な唇、暗い背景と一体化した黒髪。黒田清輝とともに明治洋画界を牽引した藤島は、浪漫主義的な作風で知られ、与謝野晶子の歌集『みだれ髪』表紙絵なども手がけています。生涯男性はほとんど描かず、女性の官能性や神秘性への男性の憧憬を感じさせる作品を多く残しました。

本展は、近現代の美術の中の“女性像”を探る試みです。近代の男性作家による男性の理想を反映した女性像から、現代の女性作家たちによる、痛みやコンプレックスをにじませながらもポジティブな女性像まで、多彩な魅力をもつ“輝く女たち”をご覧ください。
(学芸員 永松左知)

輝く女たち—その強さ、儚さ、複雑さ

Images of women — strength, fragility, ambiguity

2011年4月29日[金・祝]～6月12日[日]

茨城県近代美術館

Contents

- 1 輝く女たち—その強さ、儚さ、複雑さ
- 2・3 美術鑑賞旅行
- 4 探訪／島 剛先生を訪ねて
- 5 美に遊ぶ
- 6 所蔵作品から
- 7 企画展・日展茨城展紹介
- 8 心に残る私の一点
デジカメ撮影会／絵画教室
あとがき



©円谷プロ

様々な怪事件を調査する組織である科学特別捜査隊。その隊員であるハヤタは、小型ビートル（ジェット機）で上空を飛行中、謎の球体と衝突して命を落としてしまう。謎の球体の正体は、遠い宇宙から凶悪な宇宙怪獣を追跡して地球までやってきたM78星雲の宇宙人、ウルトラマンであった。ハヤタを死なせてしまったことに責任を感じたウルトラマンは、ハヤタに自分の命を分け与えて一心同体となり、以後地球に危機が訪れるとハヤタの意志でウルトラマンに変身・巨大化し、怪獣や宇宙人と戦うヒーローとなったのである。

「宇宙怪獣ベムラーと戦う ウルトラマン」／写真

「ウルトラマン／第1話
ウルトラ作戦第一号」より
1966(昭和41)年

1966(昭和41)年7月に、以上のような内容の第1話から放映がスタートした「空想特撮シリーズ ウルトラマン」は、その斬新で独創的な世界観や重厚なストーリー、特撮を駆使した映像などが話題となり、平均視聴率が35%を超える人気番組となりました。本展覧会では、宇宙人・怪獣等のデザイン画や立体模型、撮影現場の記録写真の他、1980年代以降に制作されたフィギュア等を展示し、美術的な視点からウルトラマンとウルトラセブンの魅力に迫ります。

(主任学芸主事 春田友則)

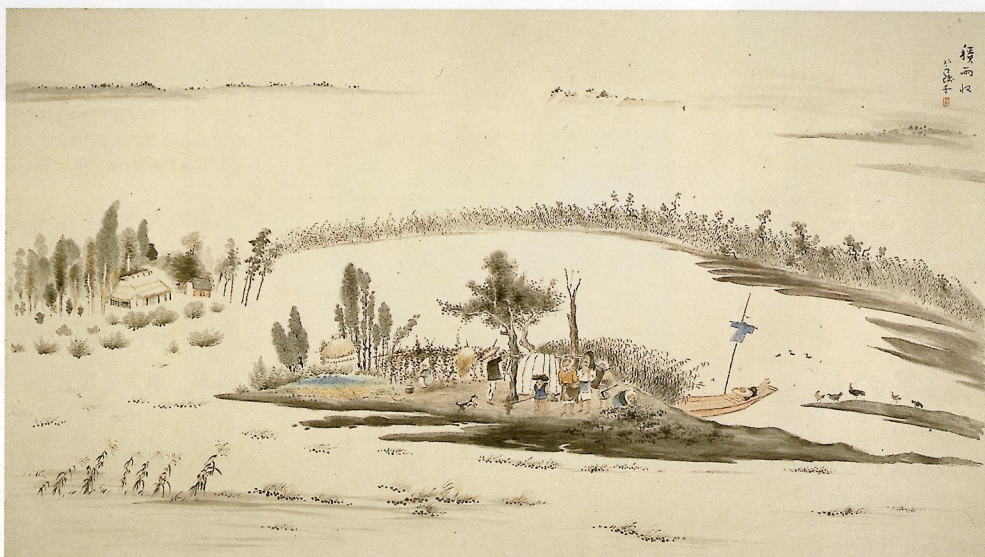
Contents

- 1 ウルトラマン・アート!
時代と創造—ウルトラマン&ウルトラセブン
- 2 ご挨拶
- 3 美に遊ぶ
- 4 探訪／平田英夫先生を訪ねて
- 5 所蔵作品から
- 6 美術鑑賞旅行
- 7 企画展紹介
- 8 心に残る私の一点
代議員会報告／絵画教室のお知らせ
あとがき

ウルトラマン・アート!

時代と創造—ウルトラマン&ウルトラセブン

2011年11月3日[木・祝]～2012年1月15日[日]
茨城県近代美術館



芋銭は挿絵画家時代に新聞記者の磐梯山噴火取材に同行したと伝えられており、また、牛久の自宅周辺の水害はもちろん、関東大震災を牛久で、丹波大地震を旅先で経験するなど、直接間接に大きな天災に関わっています。家業が農業であったので、日照りや水害などの自然の脅威に対しても、敏感であったでしょう。本作品では、洪水が収まり、水没をまぬがれた小さな地面の上で家族が空を見上げています。食事の支度のために、残った作物を探している人の姿も見えます。今回の展覧会の副題「震災後の眼で、いま」には、この家族の表情に託した芋銭の思い、あるいは天災の脅威を知った上で、穏やかな農村風景を繰り返し描いた芋銭の自然観、人生観を改めて作品の前で感じ取ってもらえる展覧会にしたい、という意図がこめられています。

(主任学芸員 今瀬 佐和)

せきうおさまる 「積雨収」

昭和5(1930)年
紙本・彩色・軸装
60.6×108.5cm
財団法人 平木淳世絵財団蔵
(前期展示)

小川芋銭展—震災後の眼で、いま—

2012年3月17日[土]～5月20日[日]

前期 3月17日[土]～4月15日[日]

後期 4月17日[火]～5月20日[日]

茨城県近代美術館

Contents

- 1 小川芋銭展—震災後の眼で、いま—
- 2 探訪／飯泉俊夫先生を訪ねて
- 3 美に遊ぶ
- 4 美術鑑賞旅行
- 5 海外美術鑑賞旅行のポイント
- 6 所蔵作品から
- 7 企画展紹介
- 8 心に残る私の一点
絵画教室
あとがき

游 美

Yub i
No. 70



「犬」

昭和25(1950)年
油彩・カンヴァス
90.5×73.0cm
東京国立近代美術館蔵

須田国太郎(1891-1961)の作品の特徴は、黒を基調とした重厚な色彩にあります。パリではなくスペインのマドリードに留学し、プラド美術館などでルネサンス以来の伝統絵画を研究した須田は、その後、陰影のうちに対象を描く独特の作風に達しました。色彩を塗り重ね、明暗を強調したその作品は、多くの日本人画家を魅了した印象派の原色を併置する画面とはまるで異なるものでした。

代表作として知られる「犬」は、黒がとりわけ多用された作品です。影が実体化したかのような真っ黒な犬は、赤く目を輝かせ、強烈な存在感を放っています。

本展では約120点により須田の深遠な絵画世界を回顧します。全ての色彩を内包するような濃密な黒の魅力を、会場で味わってみてください。

(主任学芸員 井野 功一)

いんえい さんさん
陰翳、燦燦。

須田国太郎展——没後50年に顧みる

2012年7月21日[土]～8月26日[日]

茨城県近代美術館

Contents

- 1 陰翳、燦々。須田国太郎展——没後50年に顧みる
- 2 新副館長のご挨拶
企画展紹介
- 3 企画展紹介
- 4 館長寄稿
- 5 探訪／田仲範子先生を訪ねて
- 6・7 美術鑑賞旅行
- 8 心に残る私の一点
絵画教室
代議員会の報告
あとがき